

學術談話會技藝科部會報 第五號

講 演

技藝教育に就て 内海 講師

技藝といふことについて其定義を調べました所が中々澤山ありますのでどれをとるべきか判断することがむつかしく又簡単に言に表されにくいのであります定義は一寸いひ表しにくう御座います其内容は畧諸家の説が合して居るやうであります。

技藝とは何かといへば技藝は人の内界の表出であると云ふて差問ひない故に技藝の中には第一言語の系統に屬するもの即言葉文學詩歌音樂の如きもの第二身體の身振りて表すもの即芝居は其よい標本で其他日常の舉止に表はれて居ます第三圖畫、彫刻又は製作の方面に於て表すもの即多く手指によつて表出するものであります是れもやはり心で想像した事を表すのであります要するにこれ等は凡て内界の表出でありますから技藝でありますけれど今日私共が普通に技藝と申します所のものは其の中の一部であつて言語舉止等の表出によるものは技藝とは言はないで藝術と

申して居ます即我々の申す技藝とは手指の表出によるものを言ふ狹義の技藝で廣義の技藝は内界の表出全體をさします。

其の技藝の中で殊に女子の教科として授けられて居るものを大別すれば二つになります其の一は家事的工藝でそれには裁縫手藝手工染色洗濯割烹があります昔から日本の女子の藝として行はれた插花もやはりこれに屬します點茶や琴はちがひます。

も一つは家事的科學で即この方面に於ては品物で表出することは多くないけれども主として學問を根據としてたつ即家事育兒割烹のやうなものであります割烹染色洗濯はどちらに入れてもよいのでありますそしてこれ等のもの全體に通して共通の點が一つありますこれは何かといふと其表出の仕方にて常に美しくしてゆく同じ品物を造るにしても調理するにしてもきれいにしてゆかうといふ感じ即審美的情操が常に伴つて居ることであります元來技術といふものは根本を尋ねますと其最初は人間の必要から起つたものであります即人間がまだ發達しないまだ社會をつくつてゐない前を考へて見ると人は別に定まつた所にすむのではなくつて山野を跋涉して一處不在の有様であつて其の頃は食は野生のものをとり雨ふれば木蔭にやどるといふ程のものであつたこれが稍進んで隱處をつくり裸體の代りに木の葉を以て身體を被ひ生のものを食べずに煮てたべる様になつたしかしこの時代にはまだ生活の必要をみたすに追はれて人の能力の總てを其に集注しなけ

ればならなかつたからそれを美的にするといふ程の餘力を有たなかつたのであります所がだん／＼世の進み文化が發達するに従ひまして人の體力及腦の力に漸次餘裕を生じ同じ衣物でも無地のものより模様のあるものは家は雨露を凌ぐのみならず外觀の美をも考へ食も饑餓を防ぐを以て満足せず見た所美感を興へるもの嗅のよきもの味の佳なるものとだん／＼力を其の方面に加へるやうになり其極今日では美術は人間の必要以外に獨立させるやうになりました繪は何も日常生活に必要なものではない我々は肉や野菜は喰べなければならぬが美術はなくとも人間は生活し得るのである更に美術を食物に例令て言はゞ食物の調理に鹽を使ひ胡椒わさびを用ひて味を佳くし以て胃の消化を助ける如く美術は味を付ける役目をなすものであつてさういふ意味で我々の生活の上に必要なものであります技藝を更に他の言を以て申せば色と形とを教へるものと申しても差つかへはありませぬ如何なる技藝にしても必ず伴つてゐるものは色と形とであります。

この學校に於ては技藝科の主なるものは裁縫手藝手工家事となつて居ますがさきほども申しました美はこれらのものに共通のものであります其の美の伴ひ工合の程度によつていくらかのちがひがあります勿論凡てに美術は關係がありますが其の關係の僅なものもあります又あるものは美術と美術でない方面が半分づゝ位のものもあります又理科的の方面に傾くものと美術の方面に多く傾くものとあります元來美術は情の表現であり科學は智の結果であります智の方を多く含む技藝

と情緒を多くはたらかず技藝とは其間に違ひがあります即本校に於て手藝と稱するのは美術の方に多く關係のあるもの手工は科學の方に多く關係があります勿論双方共明確なる界はないので兩者の間に明確な劃線を引くことは出来ないであります手藝手工といふのは學校的の言でこれを通俗的の言でいへば工藝工業と申します。

工業と申しますと全く美術に關係しない様に思はれますが決してそうではなく何處の國でも美術を離れた工業はありません極實用のみを主とする機械でさへもこれをつくる人はこれに對して美といふことを考へますミシンは針がはこべばよいだけでなくて使用するに快感を與へるやうにくつてあります工藝は勿論科學にも關係があるが多く美術の方に關係をもつてゐます。

裁縫は技藝の一であります手藝手工の何れとも考へることが出来る人々によつてどちらに入れるかゝちがひます或は手藝全體を裁縫といふ中に入れる人もありますこの裁縫は他の一般の技藝とは少し違ひます前に申しました様に技藝は人類の内界の自由發表であります裁縫はどうかと申ますとこゝに多少限定されてある所があります寸法だの形だのを自分の自由にかへると云ふことは出来ません形をよくし色合を考へるのは自由であるがある點までは限定されてゐますこの點が枝藝本來の意義に少しちがふのであります技藝といふ意味の主要は前述の通りであります之を小學校の教科で申しますと女子には裁縫があります一般には手工として課せられて居ます園藝だ

の農業だの割烹だのを同じく手工の名稱の中に入れて居るのもあります兎に角吾人は手工科とは小學校に於ては手藝手工を總稱したものと見て差支ないと思ひます。

そこで技藝を教へる教授は實業教育か普通教育かといふと勿論兩方に屬して居ます私共はお互に普通教育に従事したものでありますから普通教育に屬する技藝について述べるのであります一體技藝教育はいつ頃から起つたかと申しますと今日まで進んだ道すじにはさき／＼にいろいろの變動がありました、その細かい所は略します教育史で見ますと技藝教育を唱へ出しましたのは歐洲ではコネニウスでありますもつと前から實際にはあつたにちがいませんが書物の上に出て居ません教育者が理論として發表したのがこの頃でこれを實行したのはフランクであります英國ではロツクが出まして讀書算術の教科では人間が迂遠になる實社會に間に合ふ人間を作る爲に技藝を教へる必要があると稱へ出しただん／＼この説が教育社會に論せられるに至つたベスタロツチとフレーベルの意見でありますそれは教育史でよく御存じでせうが順序としてフレーベルの意見を申しますと。

人間は教育を受ける素質を持つて生れました他人が其の素質をつくるのではありません發達して行く先天的性質を持つて居るのであつて教育は是を誘發するものであるそれには如何なる道具立てが要るかと申しますとそれは他人の經驗ではゆかないそれからその人の心が内に働かねばならぬ

それは何かと申しますと即其の周囲をとりまいて居る森羅萬家でありますそこで宇宙に擬した恩物をつくりましたのでありますこの教育的の考へはどこの國でも用ゐられて居ます氏の幼稚園についての考へは外にもいろいろ異説があるが根本の考へはまだ大きな反對はありませんさういふわけでフレーヘルは子供は遊ぶことが大切で其れを巧みに導くのが教育と考へましたそこで遊戯の中にいろいろのものを採用し物に表はすことの出来ないものを其の中にいれました、フレーベルが常に申しますのに「人は實行によつて初めて學問が出来る」と或は「世界は大なる學校である」といふ風でありました。

其のうちにかの有力の教育者ヘルバルトが出ました新しい説を唱へて大いに世に尊重されましたが技藝教育については大いに有力なる説は唱へませんでしたヘルバルトとフレーベルとの考へを對稱するとそこに大きな差があります。フレーベルは人は技藝教育によつて學問をするといふ考へで身體を動かすのが元で學問は其の上になり立ものであるといひました。ヘルバルトは人には智識を發達させて情意を強めねばならぬ而して尙指先がよく動くやうにせねばならぬ即心のはたらきと技藝の發達とは平行せねばならぬといふのであります。

フレーベルの意見に附衍してかつ自家の説を加へて盛んに行はれて居るのは手工の方面で有名な

シカゴ大學の小學校を經營したジョンデューエーであるこの人の著書としては別にないが其の講演が出版せられ各國の語で譯されてゐます。

この人の考は學校では何を教科とするかといふとそれは社會生活これが即教科である社會生活とは何を意味するか今日の社會生活では大切なものは勿論精神教育も大切ではあるが實業がまた大いに大切なものである然らば實業とは何か昔は衣食住の道を満足させるのが實業であつた今日ではそれ以上にもつと必要なものが出來た我々が共同生活をして行く上に於て更に二つの要素があるそれは運輸交通である衣食住運輸交通この五つを社會生活の重なるものとしたそこで小學校の教科はこれ等の五つのものが實業を意味するとすればこれを如何にして教へるかといふに其道筋が三つある。

人間の活動は三つある一つは衣服の系統に屬するものこれには植物の栽培織ること縫ふこと二は食物に關すること三は農業割烹等三は住家に對する人間の活動これには木工が其代表的のものである。木材に關するもの繊維に關するもの食物に關するものを教へれば五つの要素は自然に教へられるといふ考であります。

又近頃やかましくなつてゐるのは獨逸のカールスルーエの第二師範學校長のライの説であります

この人の教育説は近時筋肉活動主義の教育又は實行主義の教育として唱へられて居るものであります人間の意志を強固にするには教壇の前で千百の言を費しても効果はないそれには筋骨を活動させねばならぬ又智識を同化させるのは書物の教育だけでは出来ない實行によつて得るのであるといふ前提で其の結論として意志と智識を得るには筋骨を動かさなければならぬと即筋肉活動主義といはれて居るのでありますこの説は現今有力なものであります著書は一九〇二年に出版されましたこの主義は漸次擴まる傾向を持つて居ますこの主義を實行するには技藝を第一の教科とする必要があります日本では元良博士が同様の説を持つて居られる一昨年七月頃時事新報に發表せられた先生の人格修養に對する心理上のことをのべられてゐたもので見ると「人格とふものは中々沈黙考では出来ない凡そ人格をつくるにはやはり實行に訴へなければならぬなせなれば人格をつくるは神経中樞を多く働かすか否かにある故に屢はたらかすといふことが人格をつくる要素である」とありましたこれがこの筋骨活動主義と殆んど同様の歸着點に到達するものと考へられます。

現今の教育學者間の技藝に關する主なる考は今までに申しました通であります日本に特に技藝教育の必要を切實に感ずる理由はまた特にあります

即ち日本では吾人の日用に供する必需品すら悉く生産することが出来ない其適切なる例は未だ我々日本國民全體の食にあてただけの米が出来ないので輸入しなければなりませんそこで現時の問題は輸入税を減じて米價を下げたらといふことでありますも一つは工業用の原料の不足でこれも他國から輸入せねばなりません室蘭に製鋼所九州に製鐵所はありますが矢張外國から輸入を仰がなければならぬとしてまたよい鐵は出来ないで其れもやはり外國の供給によるのであります毛織は勿論日本のだけでは足りないので大部分輸入いたします紙も亦原料が不足こんな凡てが不足であるのに人間は一年に五十萬づゝ殖えるこんな人民の殖えるのは外國には例のないことであります而かも食料品工業品はないのである如何にして多くの國債をかへし安全な生活を營むことが出来ませうかそれには二つの方法があります一つは移民で他は製造業を盛んにすることです

ありますこの二つのものが目下必要なことであります。實業教育を盛にせざるべからざる理由は上述の國狀に就て見るも明白なことでありませう夫故に二十七八年の戦役以後大に此の教育が起りまして各府縣に此の教育機關を備へて居ないものは殆んど無い迄に普及しましたが普通教育に於て此の種の教科を加減するに至つたのは近頃であります何故に今日實業教育が必要かと申すとそれは實業的の傾向をもつた人を多數につくる爲であります一國の工業を盛んにするにはやはり國民全體にそういふ傾向がなければなりません獨逸が現在のやうに發達したのはかの國ははじめは餘り盛でもなかつたのを百五十年乃至は二百年以前

の頃から僧侶が日曜學校で實業を奨励しそれ以來盛に實業教育を奨励して今日に至つたのであります英國も亦ヴィクトリア朝に於て大に奨励いたしましたさういふ風に國民一般の氣風が向はねば盛にはならないのでありますこの點で我國に特に實業教育が必要なのであります。

故に私共は普通教育の範圍に於ける實業を奨励するのが吾々御互の任務であります決して一技一能に達した人を作るの意味でなく能く實業を好愛し其興味を感じ進んで將來實業に従事せんとする如き人を作ることは普通教育に於ける技藝科の任務であります而して此の如き國民の多數は國家富強の基となるのであります前には教育者の立場から即ち理論上から技藝教科の必要を論じたのであります但し日本の現狀から考へてもやはり技藝教育を盛にせねばならぬと私は考へます近頃一般の普通教育界で一種の傾向が起りましたそれは小學校の教科の多すぎる爲に如何せば教科を減じ得るかの研究であります昔は「讀」「書」「算術」で満足したのが今では地理歴史理科圖書手工など中等學校になると更に多いのでありますこれは日本のみならず世界一般の教育界で教科を縮めて教科數を少くしたらいふ研究が始まつて日本にも已に其一端が露はれて來たのであります根本から教科の編方をかへやうと其の意見をのべた人もありますその教科を縮める際に於て多くの人の説の畧一致する所ではどんなにちやめても少くとも必要なのは技藝でこれはよさうといふ人はありません其他の教科は文學及自然界の研究(地理博物理科)そこへも一つ數學を加へる説と加

へない説とがあります即ち數は別に教へないでも他の教科によつて自然に教へられるといふ説と獨立して教授することが必要であるとの説とに分れて居ます要するに技藝を無用なりとする説は最早ないのでありますお互にこの點は慶すべきであります。同時に我々の關係する教科がかく重要視されて居るのに對して我々大いに責任を以てこれの發達を進めるやうにせねばならないと思ひます。

私どもの覺悟

嘉悦孝子

今日の御話は別に演題と申すまでもございませんので、演題も申し上げませんが、私どもが此の世の中に立つて行く上に於ては、何か考ふる所がなければならぬ、まあ私どもの覺悟とでも申しませうか。

六月一日の或る雜誌に大木伯爵の理想的人物と云ふ御話がありました、其中の一節につきまして私が感じた事がございますそれは幕府時代の事でございますが、其の頃には國富み兵強しと云ふ藩に對しましては、賦役工事を課しまして其の藩の力を削ぐと云ふ事がありました、此の話は櫻町天皇の寶暦年間の事でございましたが、幕府は有力なる薩摩藩に木曾川の沿岸の工事を命じました元來木曾川は濃尾の平原を流れて其の沿岸は水が溢れる爲に荒れますので、工事を命